

令和5年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【めざす学校像】 児童生徒・教職員の学び合いと「つながる笑顔」、「個を活かし合える多様性社会」に向けて期待と夢を育む「港」となる学校

1 医療的ケアを含めた安全安心な校内体制構築 2 質の高い授業実践 3 互いの強みが発揮できる教職員 4 社会と繋がる力の醸成

2 中期的目標

1 安全安心を守る力の向上 ～ 児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校 ～

- (1) 学校生活のあらゆる場面で人権が尊重されるよう各人のオーナーシップ・メンバーシップ・スチュワードシップの感覚を研ぎ澄ませていく。
- (2) 高度な医療的ケアを含めて卒業後を見通し、スピード感を持ちつつ、個性に応じてスムーズに実施できる体制構築と環境整備を行う。
- (3) 事故・事案の未然防止に努めるとともに感染予防、食物アレルギー、大規模変災、情報セキュリティへの対応力向上を図る。

2 授業実践力の向上 ～ 児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた質の高い授業実践ができる学校 ～

- (1) 児童生徒が達成感、自己有用感を育みながらより良く生きるための学びの在り方を常に自問し、授業改善に向けた研究・研修を充実するとともに、切磋琢磨の姿勢を向上していく。
- (2) 自立活動における専門性を徹底して向上するための学びのシステムを構築する。
- (3) 学ぶ筋道、内容が見渡せるシラバス、自立に向かう姿がわかりやすいルーブリック評価表、観点別評価、より深い学びにつながる交野マトリクスの活用を進める。
- (4) 電子黒板・タブレットや視線入力装置等の ICT 機器やアプリ、支援機器、リモートシステムの積極的活用を推進していく。
- (5) 訪問教育の充実に向け、遠隔授業やスクーリングを一層充実していく。

3 協働する力の向上 ～ 教職員が学び合い、情報共有の上で多彩かつ柔軟な組織運営ができる学校 ～

- (1) 充実した OJT による次世代育成や継承スタイルをデザインし、信頼感と緊張感を持ちながら学び合うことを職場風土として醸成する。
- (2) 各部署で蓄積されたデータの整理、整備を必須とし、ICT を活用するなど合理的な情報共有・引継ぎシステムを作るとともに、創意工夫や柔軟な対応をしていく。
- (3) 教職員が心身ともに健康で、その使命感と誇り、やりがいを持ちながら児童生徒に向き合い、互いが持てる力を最大限発揮できるようパートナーシップに溢れた働きやすい職場環境づくりをしていく。

4 社会と繋がる力の向上 ～ 児童生徒・教職員が自分らしさを発揮(キャリア発達)しつつ、使命感を醸成する学校 ～

- (1) 「居住地校交流」「地域学校間交流」「支援学校間交流」等の充実を図り、「ともに学び、ともに育つ」教育のさらなる推進を行う。
- (2) 「地域に開かれた学校作り」実現のため、保護者・地域住民・関係機関との協働を進めながら、地域の支援教育力向上の使命を最大限に果たしていく。
- (3) 児童生徒・教職員が、その学びや想い、体験、実践を校外に積極的に発信していく。

※すべての取組を通じ「仕事のコントロール度、やりがい、達成感」「サポート体制」「量的、質的負担感」等の相関数値である職場の総合健康リスクを、府内職場平均値(102)の近似値を維持する。[R2(106)、R3(101)、R4(104)、R5(102)]

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和5年11月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>アンケート回収率は、児童生徒 20 人(17%)、保護者(50%)、教職員(100%)。保護者分はデジタル化3年め、提出の催促メールを控えたところ回答率が、昨年度に比べ24%低下。肯定的回答率は維持しているが、次年度改善にむけて、着目分析した点を以下に示す。</p> <p>1. 【児童生徒アンケート】 *保護者支援のもと家庭で任意回答に変更。小学部8人、中学部7人、高等部5人より回答があった。「わからない」の回答が設問全体の11%(R4:23%)で、教員ではなく保護者支援のもとでは、概ね肯定的評価回答率が高くなった。しかし「進学・卒業時のことを先生は教えてくださいか」という質問に対する肯定率は、今年度も低く、50%であった。「わからない」「いいえ」の回答は、小・中学部からの2名。</p> <p>【分析】卒業後に向けた活動が最終学年で実施される傾向にあること、進路学習の実施時期がアンケート実施後なのも要因と推察される。</p> <p>2. 【保護者と教員のアンケート結果の今年度の分析方法】 著しく肯定的評価回答率が低下した項目がなかったため、教職員へ結果を報告し、各分掌等で今年度取り組んだ内容の関連項目について、分析。</p> <p>3. 【保護者アンケート】 *回答率43%⇒信頼性は高くないが以下の結果。 〈肯定的意見(A+B)〉昨年度に比べ22項目中11項目が上昇。 *著しいポイント上昇は、「ICT機器(+16%)」「いじめ対応(+11%)」。 〈否定的意見(C+D)〉昨年度に比べ22項目中11項目が若干減少。 〈わからない(E回答)〉「関係機関との連携」22%(+8%)【分析】コロナ禍で福祉施設や訓練見学会等が中止であったことが要因と推察される。</p> <p>4. 【教職員アンケート】 〈肯定的意見(A+B)〉昨年度に比べ23項目中4項目がわずかに上昇。新規項目「食育」89%*次年度は保護者にも問う。 〈否定的意見(C+D)〉昨年度に比べ5%以上否定的意見が増えた項目は、項目1「ニーズに応じた教育」項目3「子ども主体の教育」項目10「子どものこと、授業のことを話し合う時間」項目24「外部への情報発信」項目19「リーダーシップ」項目20「教職員の意見反映」であった。項目10は、毎回低め。本課題分析のため、現在各部署等の声を集めて考察中。</p>	<p>第1回7月19日(水)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)校内見学 中学部エリア及び防災備蓄室を案内 2)経営計画 具体的取組み 3)学校教育自己診断項目と実施方法について質疑応答 ・職員室フリースペースの活用、夏季休業中における児童生徒の学習保証、支援学校における検定教科書の活用実態、ICT 推進が教員の負担にはなっていないのか等。 ご要望)経営計画は、府民にわかりやすいよう、専門的用語の補足説明をつけるとよい。 ・キャリア教育の充実のためには、校外との連携以前に、通学バス乗務員との連携をして欲しい。保護者と乗務員との交流の機会が欲しい。 <p>第2回12月14日(木)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)実践報告:「中学部の教育活動～学校生活の一日とキャリア教育につながる取組み」ご意見)生徒の実態に応じた、実体験に基づく学習活動が素晴らしく、映像に感動した。 ・活動等に、学校間交流も兼ねて本校も一緒に取り組める機会があれば協力する。 ・このような発信を、放課後等デイサービスや福祉医療関係機関むけて続けて欲しい。 2)学校教育自己診断集計結果と今後の分析手法と協議する重点項目について報告 ・教職員肯定回答率が低い項目は、10「児童生徒への対応や教材づくりについて、話が出来る時間がある。」と16「効果的な教職員研修が実施されている。」の2項目の結果報告。ご意見)勤務時間内に、個人が自由に仕事できる時間の少なさが関係しているのではないかと。地域の中学校では、部活動指導を外部に委託するなどしている。時間外勤務削減の時代、優先順位を大事にして仕事を見直して欲しい。それには、保護者や地域の理解も必要。 3)経営計画 重点進捗状況報告 ・外部発信の手立てとして作成されたポスターは自治会館利用者には高評価。また、今年度は要請に応じて通学バスの中まで見せていただいたことで、地域住民に大型バス運行が必要な事情を説明しやすくなった。今後とも地域住民への学校見学会を開催して欲しい。 <p>第3回2月7日(水)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)「R5年度学校教育自己診断」結果の考察について 保護者回答率についてのご意見他。 2)R5年度学校経営計画 達成状況(案) 改善に向けてヒントとなるご助言を多数頂いた。 3)R6年度学校経営計画(案)について 中期的目標について承認された。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R4年度値]	自己評価
1 安全安心を守る力の向上	(1) 人権尊重の教育推進	ア 人権意識セルフチェックシートの内容を改訂し、学期開始月初めに学年会で実施、共有。 R4作成した不祥事防止予防標語は、毎月職員会議で管理職より、関連する生じた不祥事と共に紹介。	ア セルフチェック回答率の向上。〔90%〕学年会で共有。〔学期に1回〕R4年度更新済みの不祥事防止標語の掲示〔毎学期〕	ア 人権擁護の視点で、より具体的な指導支援場面のチェックリストに改訂し、係や学年主任より声かけを行い毎月の学年会にて実施。回答率は、90%を大きく上回った。7月、12月の学年会では、在籍児童生徒の状況に応じて、話し合いを行うことができた。 不祥事標語の提示については、毎月職員会議に報道提供のあった不祥事を示し関連する標語を掲示し、防止の意識向上に努めることが出来た。(◎)
	(2) 心身の健康を守る教育の推進	ア 新年度の授業指導体制確定時に、「授業入り込み要請シート」を活用、授業進行を中断することなく、看護師の支援体制を事前に整え、機動的迅速かつスムーズにケアの実施できる体制整備を進める。 イ 食物アレルギーを含め、災害時の個別の対応表を充実させる。予備薬持参者用の服薬対応様式及び課業時間外の注入対応様式を周知し、担当が整理・活用する運用を定着させる。	ア 医療的ケアで、授業・行事が滞ることなく実施でき、児童生徒、保護者負担軽減が図れる。 イ 緊急時対応のスムーズな実施、保健室、担当が協働し対応表を更に見直しブラッシュアップする。	ア 年度当初より、依頼した時間帯と場所で、看護師による医療的ケアができた。医ケアのために、活動から長時間離脱せず、学習保障できる場面が増えた。年度当初の保護者による付き添い医ケア実施も負担軽減できた。(○) イ 予備薬の持参状況や課業時間外の注入スケジュールを個別の対応表に加えた。従来のマニュアルを、フローチャート形式へ改訂、教員・保健室・関係部署連携が一目でわかるよう整えた。(◎) 【次年度に向けて】「個別の教育支援計画」に保健情報を加え一元化する改訂準備参画
	(3) 危機管理体制の強化	ア 断水・電源喪失に備えた医ケア児を守る備蓄品を充実させ、防災備品室運用の周知徹底。体育館を避難会場とする運営訓練を引き続き実施。保護者による備蓄品確認や引き渡し訓練を検討。 イ 個人用避難袋の更新定着、発災想定時間を変えてHP通信フォームでの安否確認。	ア 備蓄水の運用方法検討、訓練マニュアルの改訂実施。備蓄品の入れ替え作業を保護者参画で防災意識向上。 イ 個人避難袋保管場所検討、フォーム入力訓練は時間を変えて実施。〔2回〕	ア バルーン式の投光器・急速保冷剤を新たに配備。 PTA 役員の備蓄室見学が、厚生委員による備蓄水整理活動につながった。実効性のある2次避難所設営訓練を全教職員で実施。備蓄食配付と体育館内のトイレエリア設営を中心に実施。アレルギー事故防止のために必要な個別の各種対応資料を作成、備蓄室の食糧と共に配備完了。 訓練実施後に各部署の反省を生かし、初期対応マニュアルを改訂済み。(◎) 【次年度に向けて】児童生徒引き渡し訓練実施検討 イ フォームでの安否確認訓練は、2回実施済み。 個人避難袋保管場所は、教室。(○)【次年度に向けて】全員が必要とする物品と個別に必要な医ケア用品や栄養剤など物品を一覧として様式に整えた。定期的な持ち帰り時期を設定したが、一部の保護者が更新できず、引き続きその必要性を啓発し、常に適切な内容となるよう更新時期を全学部で定着させていく。
2 授業実践力の向上	(1) 質の高い授業実践	ア 学部間1日出張制度と職員室フリースペースの活用で相互意見交換促進 イ 授業改善に向けたルーブリック評価表や交野マトリクスの活用と、日々の児童生徒の学習の様子を3観点別に記録するなどの工夫を加え、個別の指導計画の充実を図る。 ウ 昨年度に引き続き「小グループ型研究授業」実施。6～7名のグループ編成で、授業者と支援者に役割分担の上、授業見学、協議を行う授業者支援会議システムの充実を図る。	ア 他学部で1日出張の研修者が全校で18人〔16人〕 イ 各人がルーブリック評価表を作成し、個別の指導計画の評価が、全体を通じて、より明確に観点別の記述となる。 ウ 全グループで1本研究授業を実施。協議方法を工夫し、事後アンケートで満足度 80%をめざす。	ア 小6名、中7名、高等部7名が他学部へ。キャリア教育につながる取組の他、授業指導体制等様子を互いに知ることが出来た。職員室フリースペース活用で、初任者対象の会、学年主任会、クラス会、係会などが機動性をもって活発に行えた。(○) イ 小学部では、各学年一度は作成し、活用している。高等部においては、個別の指導計画勉強会を夏に開催。目標設定や具体的な手立てについて、共有の時期や方法について理解を深めることで、充実を図った。研究授業において、ルーブリック表より詳しい指導細案・もしくはルーブリック表を作成する教員が複数人いた。ルーブリック評価表を作成するのは、任意。個別の指導計画が明確な観点別記述になるまでには十分とはいえない。(△) ウ 全15グループで研究授業・協議会を実施。研究授業見学は、学部間で開始時間に差があり、難しい場面もあったが、おおむねどのグループも円滑に実施できた。事後アンケートの満足度は94%。(◎) 【次年度に向けて】協議会スタイルの再検討、授業者が見学者に示す「オーダー(見てほしいこと)」を「児童生徒2名に焦点をあてる」に変更する。
	(2) 自立活動の充実	ア 摂食指導、運動姿勢・動作改善に加え、車いす簡易電動化ユニット、上肢機能補助装置、視線入力装置、重力軽減装置、プログラミング教材等の支援機器に関する知見を指導支援に活かし、その実践を全教員で共有できる仕組みを作る。 イ 実態把握のためのアセスメントツールの導入により、教員の見立てが豊かになり、自立活動の個別の指導および授業の目標設定、及び手立ての充実につながるよう検討する。	ア 外部専門家の指導助言を動画やレポートにし、全教員が共有できる仕組みを作る。専門性を有する教員3人の教員がチームとなり巡回指導を継続し、「巡回成果事例報告」を全学部研修にて1回開催。 イ アセスメントツールの妥当性を担当分掌部内で確認し、全校研修後、段階的に導入し実践する。	ア 今年度より、外部専門家の指導助言を担任のみならず自活部員も参加、記録動画を、教員が自由に見られるように保存場所を周知した。摂食指導 ST、自立活動 PT、視線入力等 ICT 専門性を有する3教員は、校内巡回に加え、事例報告発表として、「ICT アクセシビリティ研修」、「校内実践報告集への寄稿」、「全肢研'23(摂食指導)実践発表」をし、校内外へ活動の場を広げた。(◎) イ 研究部・自活部協働し、S スケールをアセスメントツールとして活用決定。7月に全校研修を行い、全校で本ツールの有用性やアセスメント方法について共有。職員会議で了承を得て、3年をかけて全学部で実施することとなった。今年度は3学期に小3・6・中3で、次年度からは、小4・中1・高1と段階的に広げていく予定。(○)
	(3) ICT 機器活用とオンライン教育の充実	ア 電子黒板、タブレット活用と訪問教育を含めた遠隔授業等多様な学びの方法を探り、充実を図っていく。 イ 充実のための、個人情報やネットワーク運用管理規則等の見直しを進める。	ア 全教員が自立活動や授業においてICT機器を使用。教員自己診断で「効果的に活用している。前年度以上〔87%〕 イ 年度内に改訂し運用開始。	ア 電子黒板やタブレットは、もはや日常の授業に欠かせないツールとなった。(小)長期欠席生徒への支援として、授業動画配信やWEBでの授業参加(中)、訪問籍生徒や枚方療育園在籍生徒と朝の会等にWEBで繋がりを交流(高) 教員自己診断 84%。異動が要因で、現状維持。一方保護者自己診断 81%〔R4 65%〕と大きく伸びた。(○) 【次年度に向けて】スクラッチとコスモスイッチ連動の授業への興味関心が教員に広がってきている。光音刺激により、児童生徒の主体的な動きが促されるICT機器を充実させ実践を積んでいく。 イ グループウェアで生成された生徒作品など、セキュリティポリシー追加に向けて動いている。(○) 【次年度に向けて】1人1台端末を校外へ持ち出すルールや個人情報(訓練動画)の取り扱い規定を改定することで、安全安心かつ肢体不自由校ならではの端末フル活用をめざす。

府立交野支援学校

3 協働する力の向上	(1) 教職員の組織的 専門性向上	<p>ア 各人のパートナーシップの発揮に加え、初任者に対してチューター(2～4年め)とメンター(部主事等)制を導入し、学び直しや各々の成長を確認し合い、OJTの充実を図る。</p> <p>イ 「個別の教育支援計画」とも関連付けながら交野マトリクスを活用する。 Mapping Sheet(交野支援版専門性チェックシート)を、校内外研修等の受講計画や成果指標に活用し、自身の専門性向上に活用する。</p>	<p>ア 各学部の初任育成定例会は継続。毎学期1回以上 本校勤務経験の少ない教員の参加を大事に情報共有・協議する全員参加の学年会実施。ストレスチェック同僚サポート向上。前年度以上。[8.3ポイント]</p> <p>イ 保護者へのマトリクスの周知。 専門性チェックシートを活用して研修受講計画をする。</p>	<p>ア(小) チューター、メンター制を導入し、毎月の部会後、初任者+若手教員を集めて様々な内容「授業づくり」「自己申告書の作成について」「提案の仕方について」について話し合った。また、アドバンスセミナーでメンター制の研修を受講している先輩教員もチューター役として参加。(◎) (中)OJTの観点から2～4年目と協働し、小学部6年の保護者の教育相談を行った。 ・毎月の職員会議終了後、初任者を対象にDo会を開催。授業実践や生徒、保護者対応、自己申告書の書き方、案件の合意形成の仕方等、日ごろの困り感や疑問に思うことを気兼ねなく共有し、相談に乗れるようにした。(◎) (高) 初任者と支援学校に始めて勤務する教員対象のラベンダー会を1学期2回、2学期1回開催した。転任の希望者参加もよびかけた。初任者向け校内研修資料で、転任教員等にも役立ちそうなものを適宜掲示板等にアップし、学び直しができるようにした。(◎) ストレスチェック同僚サポート[8.5](○)</p> <p>イ 保護者へのマトリクス周知は、ホームページへの掲載と学校運営協議会への紹介にとどまる。また、Mapping Sheetを年度当初に紹介することはできたが、校内外研修受講選定や成果指標に活用するには、至らなかった。(△) 【次年度に向けて】国の研修プラットフォームも活用し、個々が自分で専門性向上に努める仕組みを整備する。</p>
	(2) 教職員働き方改革推進	<p>ア 教職員が心身ともに健康な状態で児童生徒に向き合ために(i)時間外在校時間縮減(ii)休憩時間確保(iii)校務効率化(iv)安全衛生委員会企画による心身健康状態、職場安全衛生環境の向上</p>	<p>ア(i) 課業月に1回は全教職員17時退勤履行45H/月越えのべ人数減 [26人] (iii)ICT化による業務軽減策を3つ以上講じる。</p>	<p>ア(i) 毎週火曜日を「ハートデイ」と称し、毎週17時退勤を促す。 45H/月越え延べ人数 32人(△) (iii)・職朝時間短縮および日直業務軽減にむけ「連絡掲示板」システムを利用開始。・教職員へのアンケートや投票する教育活動をフォーム作成ツールで実施。集計業務を軽減。・新転任研修用の動画を作成し、研修講師の業務軽減。 ・印刷業務軽減のため、マニュアル(大災害時の対応マニュアル、情報管理規程集等)の文書配付をやめ、上記掲示板のリンク集で各自確認・必要時印刷に変更。・資料のペーパーレス化・案件の整理、会議回数の削減(◎)。 【次年度に向けて】可搬性のある教職員端末更新後は会議資料のペーパーレス化の更なる推進。 ・各種行事の案内状送付先見直し、メール配信への移行。 ・DX化による校務効率化等により、本来業務の時間の確保 ・自己診断教員の毎年のファーストは、「児童生徒への対応や教材づくりに対して話ができる時間がある。」「[66%(73)]</p>
4 社会と繋がる力の向上	(1) 交流及び共同学習の充実	<p>ア 学校間交流(支援学校間でも計画を進める)、居住地校交流については、直接交流が難しい場合 DVD や web 会議システムなども活用をしながら、相互理解が深まるように取組み、積極的に HP 上で発信していく。</p>	<p>ア DVD 等から対面の交流機会に戻す。実践と結果を学期に1回以上 HP 公開</p>	<p>ア 全学部、対面での学校間交流・居住地校交流を実施。学期に1回以上、居住地校交流の交流予定校や学校間交流の実施内容について HP に掲載。各学部交流記事<小3件 中3件 高4件>(○) 【次年度に向けて】 次年度は、居住地校交流の依頼時期を1学期始めの懇談後から4月中旬に早めることで、円滑に交流計画を進めると共に、適時に HP で発信できるようにする。</p>
	(2) 地域に開かれた学校作り	<p>ア 地域の住民の方々やスクールサポートスタッフ、委託の通学バス職員、給食調理員、技能員などの交流を企画し、お互いが活性化できる取組みをする。</p> <p>イ 地域校園へのリーディングスタッフによる支援終了後2か月以内に本校版1か月後票を地域校園より提出していただき、より効果的なフィードバックを推進。フィードバックに繋げていく。また、校内研修に地域学校園教員や関係機関職員を呼び込み支援教育関連校内研修開催で教員間連携を図る。</p>	<p>ア 地域住民との交流や連携授業を各学部1回以上実施し学校便りとして HP 記事発信。前年度以上。[9件/27中]</p> <p>イ 市教委を通じて1か月後票回収を強化し、次回支援に生かす。校内研修参加の地域教員等者にはアンケートを実施、成果を検証。</p>	<p>【小】ア 今年度も岩船小学校区福祉委員会と連携し、地域住民と交流できた。[年2回(年1回)] 【中】アピオ講師招聘(演奏会)・製パン小売店による出前授業、ハンバーガー小売店員による買い物・接客(職業体験)を通じて地域住民と交流を深めた。 【高】ア「総合的な探究の時間」にて、交野市ボランティア団体「玉手箱」の出前授業により、地域・世代間交流(1年生)。福祉事業所「てらサポート」を初訪問。(1・2年生) 学校便り HP 記事発信。学校便り HP 記事発信。[5件・/23件中](△)掲載記事の共有化を進めたい。SNS を活用した情報発信についても検討をすすめる。 イ 提出はあったが、2か月以内が難しい学校もまだあった。期限内に提出していただいた学校は、その後のフィードバックや継続的な支援をスムーズに行えた。 ・自立活動部の協力を得て、アクセシビリティについて夏季休業中の校内研修を支援学校、小・中学校など地域の教員に公開。約50名のうち、40名が外部。訪問相談実施校や市教委の参加もあり、研修後も地域支援として連携を図ることができた。アンケート結果も好評(◎) 【次年度に向けて】2か月以内の提出を市教委に再度依頼より良い支援につなげていきたい。</p>

府立交野支援学校

<p>(3) キャリア教育の 充実</p>	<p>ア 校外でのスポーツ大会開催をはじめ、キャリア教育の一環としての学部間連携を進める。きょうだい学級を軸とした取組みを継続する。</p> <p>イ 教員向け福祉事業所等連携関係機関の施設見学や研修受講を推奨し、校外との縁結び力・教員のキャリア教育指導力向上をねらう。</p> <p>ウ 展示、児童生徒会活動(児童生徒会役員選挙運動や公約を果たす活動含む)、図書活動(読み聞かせや読書ランキング)、放送活動など含めた表現活動を活性化する。校外競技・コンクール参加・外部講師連携事業などの取組みも推奨。</p>	<p>ア きょうだい学級所属の児童生徒・教員が相互理解を深める機会を年度当初のポッチャ練習等を契機に前年度以上に深める。</p> <p>イ 教員の専門性向上の一環として研修先や内容の希望を年度当初に計画、自己申告。</p> <p>ウ 対外発表を含めて、児童生徒自身が発信、発表した取組みを HP 記事に掲載発信する。毎学期・各学部1回</p>	<p>ア スポーツ大会は、近隣で本校の災害時避難場所の地域総合体育施設「いきいきランド交野」にて初めて実施。チーム編成をきょうだい学級で組み、一同で競技できたことで、児童生徒や教員はもちろん、観覧席での保護者同士も交流を深めることができた。このほか、校内では、年に2回の交流タイムを実施。後期では、ペアの活動内容にしたことで、児童生徒のより親密な交流になったと好評だった。中3がきょうだい学級である高3の授業に進路学習の意図をもって参加したり、夏祭り等の学部行事へきょうだい学級を招待したりした。(◎)</p> <p>【次年度にむけて】内容や日時工夫で、より充実させていく。</p> <p>イ ・年度当初より校内企画の年間研修計画一覧を提示。それをもとに、各人、研修受講についての振り返りを自己申告票に記載するなどし、また、研修企画者に対しては、事後アンケートによる評価を返すことで互いに高め自己研鑽する流れを開始したが、十分な運用には至っていない。(△)</p> <p>・教員向けの福祉事業所等見学会を3回3施設で実施。入場制限があり、参加人数は 36 名。アンケート結果「見学会に対する肯定的回答」100%(27 名回答)</p> <p>・教員向けの進路研修会を行った。参加人数は 13 名。アンケート結果「肯定的回答」100%。(13 名回答)</p> <p>・コロナ禍明け、直近3年前からの卒業生進路先事業所訪問 20ヶ所。訪問教員数 25 名。(◎)</p> <p>ウ (中)【外部講師連携授業】・ミュージック・シェアリング「訪問プログラム」2回・「楽器指導支援プログラム」年間7回 弦楽器演奏指導関西万博教育プログラム3年目・大阪の伝統工芸 堺線香づくり【各種コンクール・大会への参加】・星槎道都大学カードアート大賞展入賞多数・WHO医療従事者への感謝の手紙コンクール入賞・阪神阪急ええはがきコンテスト 入選・第6回オリ丁甲子園 入選・大阪府障がい者スポーツ大会ビーンバッグ投げ優勝 (高)・トップアスリートふれあい事業(ラグビー・卓球・ハンドボール)、ミュージックシェアリングコンサート鑑賞、サンダー1万人の第九に動画で参加。(◎)</p>
-------------------------------	---	---	---